

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イberoアメリカ研究センターニューズレター vol.5 (2015)

IMÁGENES DE IBEROAMÉRICA

EL CENTRO DE ESTUDIOS IBEROAMERICANOS



写真 アフロ

目次

公開講座

関西外国語大学連続公開講座

「21世紀、ブラジルからの問いかけ ―民衆の変革力―」

- ◆**関西外国語大学連続公開講座 第1回**（2015年11月3日）
鈴木 茂（東京外国語大学教授）
「混血社会における人種アイデンティティ ―ブラジルの“人種デモクラシー”の今―」 1

- ◆**関西外国語大学連続公開講座 第2回**（2015年11月18日）
小池 洋一（立命館大学経済学部特任教授）
「ブラジルの社会自由主義国家 ―公正な社会に向けて―」 6

- ◆**関西外国語大学連続公開講座 第3回**（2015年11月27日）
山田 政信（天理大学教授）
「人の移動と宗教文化 ―日本とブラジル―」 10

- ◆**関西外国語大学公開講座**（2015年6月17日）
田代 和弘（田代珈琲株式会社代表取締役）
「ワイナリー化するコーヒーがもたらす富の分配」 14

- ◆**関西外国語大学公開講座**（2015年11月12日）
福嶋 教隆（神戸市外国語大学教授）
「スペイン語の“役割語”」 16

スペイン語教授法研究会例会

◆第8回スペイン語教授法研究会（2015年7月11日）

四宮 瑞枝（早稲田大学文学学術院講師）

「異文化能力の育成について考えよう ―スペイン語教育における文
化リテラシーと異文化トレーニングのアイデア―」

22

関西外国語大学連続公開講座
21世紀、ブラジルからの問いかけ —民衆の変革力—

第1回
混血社会における人種アイデンティティ
—ブラジルの「人種デモクラシー」の今—

鈴木 茂（東京外国語大学教授）

はじめに

2015年は、日本とブラジルがパリで修好通商条約を結んで国交を開いてから100年の節目の年にあたる。1908年に始まる日本からブラジルへの移民はもとより、第二次世界大戦前から、両国の間にはコーヒーや綿花などの貿易を通じて、経済的にも強い絆が築かれてきた。第二次世界大戦後には、製造業を中心に多くの日本企業が進出したのに加え、1990年代に入ると人の流れがブラジルから日本へと逆転し、日本各地でブラジル人の姿を見かけるようになった。スポーツの面でも、1992年のJリーグ発足前後から日本で活躍するブラジル人サッカー選手が激増した。そして、PENALTIやATHLETAなど、ブラジルで生まれたブランドのスポーツウェアも人気を博している。

このように両国には長い交流の歴史があるものの、移民・日系人と経済とサッカー以外のブラジルの実像について、日本ではどれほど知られているのだろうか。多くの日本人にとってブラジルは、地理的にも心理的にも遠い国であり続けているようだ。歴史や社会、文化についてはほとんど知られていないか、表面的なイメージが広まっているにすぎないように思われる。

「人種差別のない国」というのも、そうしたイメージの一つである。たしかに「人種差別」と聞いて、多くの日本人が連想するのはアメリカ合衆国の黒人差別や南アメリカ共和国のアパルトヘイトであり、最近ではイギリスやフランス、ドイツといったEU諸国の移民問題であろう。しかし、ブラジルの人種差別禁止法は1951年のアフォンソ・アリーノス法にまでさかのぼることができ、1988年制定の現行憲法は人種差別禁止が盛り込まれ、ただちにその施行法「カオー法」が成立している。これらの規定によって、現在では人種差別は「保釈の認められない犯罪」とされている。これらの法律は、人種差別が存在するという現実と、その撤廃が必要であるとする社会意識を物語っている。

翻って日本の現状を見れば、1965年に締結された国連の人種差別撤廃条約をようやく1995年に批准したが、その国内法は未だに制定されていない。安保関連法審議で

揺れた 2015 年通常国会では、野党から「人種差別撤廃施策推進法案」が提出されたものの、与党の反対で採決が見送られた。多人種・多民族社会のブラジルが、人種差別の撤廃と人種間不平等の是正にどのように取り組んでいるのか、日本も学ぶ意味があるだろう。

1 「人種デモクラシー」

最新の 2010 年センサスによれば、ブラジルの総人口約 1 億 9100 万人の中で、「黒人」と「混血」の合計が初めて半分を超えた。すなわち、「黒人」が 7.6%（約 1500 万人）、「混血」43.1%（約 8200 万人）、合計 50.7%（9700 万人）に達したのである。これに対し、「白人」は 47.7%で、初めて過半数を割り込んだ（他に「黄色人」1.1%と「先住民」0.4%、および若干の「無申告者」がいる）。2000 年センサスでは、「黒人」は 6.2%、「混血」は 38.5%であったので、数字だけ見れば、今世紀最初の 10 年間で「ブラジル人の非白人化」が進んだことになる（ブラジル地理統計院 IBGE のウェブページによる）。

ここで注目すべきは、「混血」化の進行とともに、「黒人」の割合が増加した事実である。これは単純な自然増というよりも、むしろ黒人運動の高まりや人種差別撤廃のためのアファーマティヴ・アクション（積極的差別是正策）の導入によって、「黒人」であることの劣等感がぬぐい去られ、誇りをもって「アフリカ系人」であることを自認する傾向が強まったことも関係している。

ところで、ブラジルにおいて、「人種差別のない国」という考え方は、「人種デモクラシー（人種民主主義）」という言葉で語られてきた。1930 年代、10 代半ばで両親に連れられてブラジルに渡り、長くサンパウロ大学で社会学を講じた斉藤広志は、日本で出版した啓蒙書の中で、次のように紹介している。

ブラジル社会には人種差別がまったくない。だから人種デモクラシーだというのが通説となっている。たとえばブラジルでも 10 年ごとに実施される国勢調査の結果をみても人種別統計というものはない。1950 年の調査まではいちおう黒人、褐色人、黄色人、白人という風に皮膚の色分けをしたのであるが、それ以後は廃止となった。それは国民を肌の色によっていくつかのカテゴリーに分けたところで、あまり意味がないという結論になったらしい。（『新しいブラジル — 現地からの特別報告』サイマル出版会、1974 年、91 頁）

ここで斉藤は、「国勢調査に人種別統計はない」と述べているが、当時の軍事政権が人種別統計を廃止した理由をはっきりとは説明していない。1964 年にクーデタで成立した軍事政権は、強力な国民統合イデオロギーの下で、「国民の分断」につながるとし

て黒人はじめ、マイノリティの社会運動を弾圧したうえ、人種差別の研究すら禁じた。1970年センサスで人種別統計が廃止された背景には、こうした軍事政権の狙いがあった。実際、1872年から1970年までに実施された、不完全なものを含めて8回のセンサスのうち、全国規模のもので人種別統計がないのは1920年と1970年の2回だけである。また、1980年センサスで復活して以降、一貫して人種別の調査が行われてきた。斉藤の著書は1983年に改訂版が出されたが、後段の部分は次のように修正されている。

1980年の調査ではいちおう黒人、褐色人、黄色人、白人という風に皮膚の色分けをしたのであるが、それもあまりあてにならない。それは国民を肌の色によっていくつかのカテゴリーに分けたところで、あまり意味がないからである。（『<新版>新しいブラジル―歴史と社会と日系人』サイマル出版会、1983年、104頁）

初版では「あまり意味がないという結論になったらしい」として、軍事政権の思惑を付度する表現であったものが、改訂版では自らの考えとして断定調で述べられている。ともかく、斉藤にとって「人種デモクラシー」とは、「人種差別がない」と同時に、「人種」が社会的意味を持たないことを表す概念として用いられていることが分かる。



鈴木 茂氏

「人種デモクラシー」という表現を誰が最初に使い始めたかには曖昧なところがあるものの、ブラジル社会の異種混濁の歴史と現状を国民性と結びつけて論じ、1920～30年代の欧米を席卷していた人種主義の対極として概念化したのは、ブラジルの文筆家ジルベルト・フレイレであった。フレイレは1933年に出版した『大邸宅と奴隷小屋』において、植民地時代の北東部のサトウキビ大農園の奴隷主の邸宅（カザ・グランデ）をブラジル社会の原型として位置づけ、そこで展開された奴隷主（白人男性）と家内奴隷（黒人女性）との性的関係、およびそこから生まれた「混血」の人々を含む大家族の形成こそ、ブラジル社会の形成過程そのものであったと論じた。そこでは、異種混濁が奴隷主の世界（奴隷主の邸宅を意味するカザ・グランデで象徴される）と奴隷の世界（奴隷小屋を意味するセンザーラで象徴される）の間の「社会的距離」を縮める機能を果たしたことが強調され、フレイレ自身によって「社会的民主化」と表

現されたのである。

ブラジルで広まった人種混濁が、別のかたちであったなら巨大なまま維持されていたであろうカザ・グランデと熱帯森林との間の、あるいはカザ・グランデとセンザーラとの間の社会的距離を縮めた。大土地所有と奴隷制を基盤とするモノカルチャが、中間に少数で無意味な自由人を滞留させつつ、ブラジル社会を奴隷主と奴隷という敵対的な両極へ分解するよう促した作用は、大部分が人種混濁のもたらす社会的効果によって相殺された。最初はインディオ女性とミナ地方出身の黒人女性が、後にはムラータやカボローシャ、クアドラドーナ、オイタヴォーナが、白人奴隷主のお手付き女中や妾、果ては正妻となってブラジルの社会的民主化を強力に推進した。（「初版への序」『大邸宅と奴隷小屋』鈴木茂訳、日本経済評論社、2005年、8-9頁。原著、1933年）

「人種デモクラシー」は多面的な概念であり、異種混濁の原因にもなれば、その結果を表すこともある。支配者である白人男性の側に「有色人」への偏見がなかったために異種混濁が起こるとも、異種混濁の結果として「人種」の差異が薄まるとも取れ、一種のトートロジー（同義反復）に陥る危険がある。また、植民地や戦時・占領期における性暴力から明らかなように、異種混濁が人種間・男女間の平等な「民主的」関係を生むとは限らない。それゆえ、後のブラジルの黒人運動や歴史学者、社会学者は、「人種デモクラシー」に潜む暴力や植民地主義を批判してきた。

2 多文化主義への動き

ブラジルの黒人運動は、遅くとも 1920 年代までさかのぼることができるが、1970 年代末から始まる民主化の流れの中で勢いを増し、かつ民主化を推進する力となった。それゆえ、1985 年の民主化後、黒人運動も社会的発言力を強め、人種差別撤廃など、その主張は 1988 年憲法にも反映された。また、民主化と前後して、バイーア州サルヴァドルのアフロ・ブラジル宗教（カンドンブレ）「カザ・ブランカ」本部（1984 年）や、17 世紀の「逃亡奴隷」の共同体パルマーレスの跡地（1986 年）が国の歴史遺産に指定されたり、パルマーレスの最後の指導者ズンビが、「独立運動の殉教者」チラデントスに次いで二番目の「国民英雄」に選ばれたりして（1990 年）、アフリカ系ブラジル人の歴史の復権が図られた。

こうした流れをさらに発展させるため、民主化以降の黒人運動は、人種差別や人種間格差を撤廃するための公共政策、アファーマティヴ・アクションの導入を強く求めるようになった。1994 年に大統領に就任したフェルナンド・エンリケ・カルドゾは、社会学者としてブラジルの奴隷制や黒人差別を研究した経験があったが、1996 年、「国

家人権計画 (PNDH)」を策定し、その中にアフリカ系人を含むマイノリティを対象とするアフーマティヴ・アクションの推進を盛り込んだ。2001年8月末から9月初めに南アフリカ共和国のダーバンで開催された国連の「反人種主義・差別撤廃世界会議」では、ブラジル代表団に多数の黒人運動活動家が同行し、サンパウロの女性活動家エドナ・ロランが最終報告者となって取りまとめられた「行動計画」でも、各国政府がアフーマティヴ・アクションを実施するよう勧告がなされた。そして、これを後ろ盾として、2002年、まずリオデジャネイロ州が、州立大学の入学試験にアフリカ系人と先住民向けの特別入学定員 (クオータ) を導入し、2004年には国立大学として初めてブラジリア大学が続いた。

現行のブラジル憲法は、明白に多文化主義を謳っているが、「人種」を判断基準とする大学入試でのクオータ制導入には、根強い反対論が存在する。その中には、リオデジャネイロ連邦大学の著名な文化人類学者ピーター・フライのように、「人種デモクラシー」を理由とするものがある。少し長くなるが、核心部分を引用しておこう。

今日大流行りの「多様性」の称揚は、しばしば現実には「人種」もしくはその PC 的婉曲表現である「エスニック *etnias*」の称揚に帰着する。「アフーマティヴ・アクション」と呼ばれる公共政策が、「人種的」不平等を減らすために実施されている。しかし、このような政策は、その受益者に人種的帰属意識を要求するため、人種への信仰が強化される。アフーマティヴ・アクションがどれほど善意に基づくものであれ、その論理的帰結として人種という神話を強化する。アメリカ合衆国や南アフリカ、ジンバブエで見ることができるのは、まさにこの現象であると私は確信している。人種の神話の上に強固に築かれたこれらの社会では、その神話が人種主義撤廃のための戦いにおいて再び舞い戻っている。

ブラジルの場合、状況は別である。遅まきながらの奴隷制廃止と共和国宣言は、「人種」に法的支持を与えなかった。ブラジルの人種主義は社会全体で非公式に続いてきたが、国家が直接行うことはなかった。確かに、人種への信仰はヨーロッパ移民の奨励のような特定の政策に影響を及ぼしたが、市民の「人種的帰属意識」は個人的な意識か、たまに「白」「黒」「黄」「褐色」「先住民」という人種／肌の色を尋ねるブラジル地理統計院 (IBGE) の調査員への回答に過ぎなかった。(中略)「人種的」アフーマティヴ・アクションは、「褐色」と「黒」を「黒人」として一括し、事実上、3つの「人種」(「黒人」「白人」「インディオ」) だけのブラジルを生み出した。(中略) アフーマティヴ・アクションは、異なった諸人種からなるブラジルのために異種混淆のブラジルを否定するという効果を発揮する。(Peter Fry, *A pertistência da raça*, Rio de Janeiro, 2005, p.16)

ここには、先に紹介した斉藤広志に似た、ブラジル社会において「人種」が意味を持たないことの説明がなされているのと同時に、異種混雑を一種の「国是」、ブラジル社会の本質的編成原理とする考え方を垣間見ることができる。理念もしくは理想と現実の差をどう埋めるのか、反対論にはブラジル社会の過去と現在において、社会的構築物としての「人種」が持つ意味を軽視する傾向が否めない。

おわりに

ブラジルにおいて、アフリカ系人を対象とするアファーマティヴ・アクション、とりわけ大学入試でのクォータ制導入は、ルーラ政権（2003～10年）の下で大きく進展した。ルーラはまた、大統領就任とともに「人種平等推進庁（SEPPIR）」を創設したが、任期末の2010年には、議会で可決された「人種平等憲章」に署名した。続くジルマ・ルセフ政権下では、2012年、法律によってすべての国立大学の入学者選抜にクォータ制度を導入することが決定された。現在行われているクォータ制度には、「人種」だけでなく「階級＝所得」が判断基準として加えられているが、人種別人口構成など、各地の実情に合わせてブラジル全国の国公立大学に広まっている。

2016年にリオデジャネイロで開催されるオリンピックとパラリンピックは、「スポーツを通じた社会の融合」を掲げて招致された。ブラジルにとって、それはすでに実現された成果ではなく、これから達成しようとしている目標である。世界各国から集まるアスリートや観客は、ブラジルに「人種差別のない国」ではなく、「人種差別撤廃に努力している国」の姿を見ることになるだろう。

第2回

ブラジルの社会自由主義国家 —公正な社会に向けて—

小池 洋一（立命館大学経済学部特任教授）

世界は経済停滞、失業、貧困、格差、地球温暖化など多くの問題に直面しています。これらの問題は、市場に過度な信頼を置いた新自由主義と、それによって加速した経済自由化、グローバル化によって引き起こされました。そこで現在では問題を克服、軽減するため、あるいは経済自由化とグローバル化への感情的な反動として、国家の経済への介入やナショナリズムが強まっています。市場が不完全な制度であることは明確ですが、他方で国家の過度の、あるいは誤った介入が非効率、不公平、モラル喪失を引き起こしてきたこともまた紛れのない事実です。市場と国家は常に対立しているわけではありません。それらはしばしば同盟を結び結託し、自らの利益を拡大しようとします。そこで市場主義、国家主義を超える開発モデルが求められています。ブラジルの「社会自由主義国家」（Social

Liberal State) もそうした開発モデルの一つです。社会自由主義国家は、経済成長と公平の実現には国家も市場も必要であり、加えて市民社会の役割も重要だと主張します。社会自由主義国家とはどのような政治制度なのか、そして我々はブラジルの挑戦から何を学ぶべきかを講義します。

ブラジルの新しい開発モデルを考えることが我々にとっても意義をはじめに述べていきたいと思います。日本社会は 1990 年代はじめのバブル崩壊以降長期にわたる不況のなかにあります。そうしたなかで貧困人口が増加し、現在では先進国の平均を超えています。子供の貧困比率は先進国のなかで最も高い水準にあります。経済の後退のなかで企業は、競争力を高めるため、また成長著しい市場を求めて、アジアへの投資を加速させています。他方で国内では企業は非正規雇用を増やし、正規雇用について労働強化、賃金のフラット化が進んでいます。労働組合の弱体化もあって労働分配率が低下しています。その結果格差が広がっています。中間層の国日本はもはや幻想でしかありません。そして重要なことは貧困や格差が政府の政策によっても引き起こされていることです。派遣労働の完全自由化、労働基準監督の無機能、消費税引き上げ、所得税の累進率引き下げ、年金削減などです。日本の所得分配は、政府の再分配政策前では先進国のなかで中程度ですが、再分配後では米国などに次いで悪い部類に属します。住宅減税、孫の教育費税額控除、年金の株式運用拡大などの政策も富裕層優遇政策です。

そして重要なことは、こうした貧困や格差拡大が、人口の減少に拍車をかけ、若い世代の教育と人材形成を抑制し、また健全な消費を支える中間層を益々減らし、供給面と需要面から経済成長を支える基盤を失わせることです。ブラジルでは 2013 年 6 月に「ワールドカップよりも貧困削減」を、また 2015 年の 2 月にも「景気の回復と腐敗一掃を」をスローガンに反政府運動が起こりました。現在のジルマ政権の支持率は 10% を切るまでになっています。それに比べて日本はどうでしょうか。アベノミクスは完全に失敗し、貧困と

分配は益々悪化し、さらに加えて特定秘密法、安保法、原発再稼働などの悪政が続き、これに対して司法は機能せず、社会運動がなおも低迷するなかで、政権は高い支持率をえています。今回の講演会のシリーズ全体のテーマは「21 世紀、ブラジルからの問いかけ — 民衆の変革力 —」です。ブラジルの民衆の営為は日本社会や民衆に何を投げかけているのでしょうか。



小池洋一 氏

さて、ブラジルは 1950 年代以降先進国家の強い介入のもとで輸入代替工業化を進めてきましたが、80 年代に對外債務累積やインフレなどマクロ経済不均衡によって行き詰まっていた。そこで、IMF や世銀などの指導のもとで貿易自由化、金融自由化、規制緩和、民営化などの経済自由化へと開発政策を転換しました。それはインフレ抑制には成功しましたが、金融危機、失業、貧困や格差の拡大を引き起こしました。経済自由化を支持する人たちは市場に絶対の信頼を置いています。経済を人々や企業の営利追求に任せれば成長と厚生も実現できると主張します。所得分配については格差を肯定的に捉えます。その根拠がトリクルダウン仮説です。富裕層は、貧乏人のように所得のすべてを消費せず、一部を貯蓄します。貯蓄は金融市場を介して企業の投資に利用されます。投資は成長を促し、広く社会を潤すというわけです。これに対して構造派と言われる人たちは、富裕層は貯蓄を海外に逃避させる、消費は奢侈的な性格をもち輸入を増加させ、国内産業と労働者を潤しはしないと批判し、国家による所得再分配政策の必要性を説きます。

こうした議論はつきつめていくと、経済成長と社会的厚生および公平にとって市場と国家のどちらに信頼を置いて経済を運営するかという問題です。今日お話する「社会自由主義国家」論は、市場も国家もともに必要であり、さらに第三セクターとも言うべき市民社会もまた重要であると主張するのです。まず国家は政治家や官僚ではなく市民のためにあるのだと言います。したがって市場のように効率的に運営され市民に質の高いサービスを提供する必要があります。教育、医療、福祉などの社会サービスに加えて科学技術は、国家が引き続き資金を提供しますが、実際にそれを担うのは、教育法人、医療法人、研究所などの公益団体とされます。民間の企業でもできる経済活動については民営化します。しかし、燃料、電力、通信など公益性の高いものについては、価格、サービス内容などで国家の承認を必要し、審議に市民の代表が参加します。経済の制度である国家、市場そして市民社会はともに利点もあれば欠点もあります。社会自由主義国家は不完全な国家、市場、市民社会を組み合わせる制度なのです。

社会自由主義国家を支えるものとして重要な制度というか仕組みがあります。ここでは参加型予算（OP）、連帯経済（ES）、企業の社会的責任（CSR）をとりあげます。参加型予算は、市民が町内会から地域、市全体などの各レベルで討論し市の予算を決めていく制度で、南部の都市ポルトアレグレで 1989 年に開始されました。現在ではブラジルで 150 以上の都市で導入され、さらに先進国の都市でも採用されています。この制度が導入された背景には、代議制、官僚制が十分に機能せず、政治と行政が癒着するなかで、市民とりわけ政治的影響力が乏しい貧困層などに社会的資本やサービスが提供されていないことがありました。本来代理人である政治家が主権者である有権者の意向に沿って行動しないエージェント問題は、間接民主主義の問題点としてしばしば指摘されています。選挙の洗礼を受けない官僚も市民の利益に沿わない行動をとる可能性があります。参加型予算はそうした欠陥を克服しようとするものです。民主主義の王道である間接民主主義を否定すると

の批判もありますが、住民が決定した予算案は議会で審議されるし、予算案は官僚と協力して作成されるので、この制度はむしろ間接民主主義を補完し強化するとの見方もできます。

第二の連帯経済は、経済自由化によって失業と貧困が広がるなかで、人々が協力して雇用を作り生活を守る運動として始まりました。その意味ではじめは生存のための戦略でしたが、その後この運動を指導している人たちは連帯経済を市場（企業セクター）に代わる、あるいはそれと並ぶ経済と捉えるようになりました。連帯経済は、2002年にポルトアレグレで開催された世界社会フォーラム（WSF）とともにブラジル各地に広がり、翌年には労働雇用省に連帯経済局が設立され、連帯経済を支援する制度が多く作られました。現在連帯経済基本法の制定が準備されています。連帯経済は互助、自主管理、平等などを原理とし、具体的な形態としては協同組合、回復企業（労働者自主管理企業）、ワーカーズコレクティブ、交換クラブ、フェアトレード、地域通貨、コミュニティバンクなど多様な形態があり、政府、大学、労働組合、NGOなどがそれらを支援しています。連帯経済は、企業セクターに比べてなお限られたものですが、企業セクターが主導する経済（資本主義）が失業、貧困、格差、環境破壊などを必然的に招くという認識に基づいて、資本主義のオルタナティブとしての役割を期待されています。

最後の企業の社会的責任活動は、キリスト教の影響もありブラジルでは早くから行われてきました。社会意識の高い企業家は、経済成長が置き去りにしてきた貧困、無教育、児童労働、スラムなどの社会問題が、国家の責任であるとともに企業の責任と考えたのです。現在では大半の企業が何らかの社会的責任活動を実施しています。企業の社会的責任行動を促すため経営者教育がなされ社会活動報告書作成が推奨されています。一部の地方政府、自治体では企業に社会活動報告を義務付けています。サンパウロ証券・商品・先物取引所（BM&F Bovespa）は、NGOが計画する社会プロジェクトのため、社会環境株を発行し資金を提供する仕組みを作っています。旧国営企業の年金基金の運用や政府系金融機関の融資において、積極的に社会的責任を果たす企業を優先する社会的責任投資（SRI）が行われています。社会的責任行動を繰り返し、社会的責任行動をNGOと協力して実施すれば、企業は社会目的を意識して行動するようになります。しかし利潤を追求する企業の社会責任活動には限界があります。そこで、国家による企業の規制や消費者の行動が重要になります。商品やサービスそして企業を選択するのは最終的には消費者です。ブラジルでは、環境や社会問題を意識した責任消費、倫理的消費の運動が活発になりつつあります。学校教育に消費者教育が導入されています。企業は最終的には社会のためにあり、決してその逆ではありません。

ブラジルが目指す「社会自由主義国家」の実現はまだ遠い彼方にあります。参加型予算、連帯経済、企業の社会的責任は多くの問題点を抱えています。しかし、ブラジルが公正な社会を求めて挑戦し格闘していることも事実です。ブラジルに対する画一的で否定的な理

解を脱して、その優れた点を学ぶことも必要です。政治と経済が劣化し社会が疲弊する日本の場合がとくにそうです。

第3回

人の移動と宗教文化 —日本とブラジル—

山田 政信 (天理大学教授)

はじめに

1908年に日本からブラジルへ農業移民が渡るようになって以来、両国の間で人が、そして文化が移動するようになりました。ここで言う文化とは、人の生き方とその表出方法および形態としておきます。とすれば宗教とはまさに文化そのものだといえます。というのも、宗教は聖なるものとの関係性を問うという前提があるにせよ、人の生き方の表出に他ならないからです。宗教学者ミルチャ・エリアーデは、私の大学院時代の恩師に宗教について両手を大きく広げて次のように語ったそうです。



山田政信 氏

「私たち人類の歴史はずっと宗教的でした。しかし、近代以降、私たちは私たち自身が宗教的であることを忘れていたかのようです。とはいえ、この両腕の幅が人類史だとすると、宗教を忘れた近代史はこの親指と人差し指を合わせた隙間ぐらいにしか過ぎないのです。」

近代史の重要な一角をなす世界的な人口移動の文脈において、新天地ブラジルで生活を始めることになった日本人移民の多くは、コロニアと呼ばれる植民地に配耕されました。移住当初は、宗教を忘れたかのようにして暮らす人が多かったようです。本題である宗教のテーマに入る前に、少し日系人社会についてお話ししておきましょう。

先ず、コロニア（植民地）とは、ブラジルという大海に浮かぶ、島民全てがある国の出身者という浮島のようなものと理解していただければいいでしょう。たとえば日系コロニアなら、そのなかでは日本語を話し、擬制的日本文化が踏襲されます。そこは外界の影響を受けにくいばかりでなく、入植したときの「時間」がそのままストップしていることが

多いのです。筆者がブラジルで移住者として生活を始めた 1980 年代半ばでも、40 歳代以上のニッケイジンならばニホンゴを流暢に話す人が多くいました。ここでカタカナ表記しているのは、彼ら自身がポルトガル語の中に日本語を取り込んでいるからです。

食事では、トーフのミソシルなどの日本食はあたりまえで、ソバやうどんの乾麺も売っています。かつてサンパウロの東洋人街ではヨーカンが「名物」という謳い文句で売られているのを見かけました。すべてブラジル製です。電話の応対も「モシモシ」で始まります。サンパウロ市内の日系人社会は集住地としてではなく、目に見えないネットワークとして存在していましたし、ポルトガル語が主流となった現在もなお、その様子に変わりはありません。実は今の日本に存在する日系ブラジル人コミュニティの在り方も、逆バージョンとしてではあれ、これに酷似しています。それでは本題に入ることにしましょう。

1 移民略史

1-1 ブラジル：開かれた扉

ブラジルへの移民は、それまで行われていたハワイ移民が停止された年に始まりました。当時の日本では、日露戦争後の経済状況の混乱によって農民が苦しい生活を強いられました。一方、1888 年に奴隷制度を廃止したブラジルでは農業労働者が不足していました。そのような需給バランスによってブラジルへの移住が始まったのです。しかし、コーヒー農園に「金の生る木」があると信じた移住者たちは、想像だにしなかった奴隷の代替労働者としての扱いを受けることになりました。そのような中でも、彼らは実直に就労し経済的基盤を築き上げて、今ではブラジル社会で「ジャポネス・ガランチード（信頼できる日本人）」との名声を得るまでになっています。ブラジルはたくさんの移民からなる多民族国家で、日系人は「ジャポネス（日本人）」、ドイツ系人は「アレマウン（ドイツ人）」、イタリア系人は「イタリアーノ（イタリア人）」というように呼ばれるのが普通です。彼らはしかし出自が異なる「ブラジレイロ（ブラジル人）」として同等です。こうしたことからブラジルの人々は外国人に対しても開かれた感性を持っています。

1-2 日本：閉ざされた扉

一方、日本人は外国人に対してどのように接することが多いでしょうか。残念なことに、日本人はシャイで見知らぬ外国人には閉鎖的だという傾向が近年になってもあまり変わっていないようです。日本では、1990 年に出入国管理及び難民認定法が改定され、移民 3 世までの日系人に限って国内での自由な就労が認められるようになりました。その後、ブラジルから家族を伴って来日する人々が急増し、2008 年には 32 万人を記録しました。リーマンショックと 2011 年の東北大震災の影響でたくさんの人が帰国して、今では約 17 万人に減少しています（2015 年 6 月現在）。彼らの多くは自動車産業や造船業が盛んな東海地方を中心に、群馬や広島にも住んでいます。祖父母の祖国に「帰ってきた」はずなのに、

顔は日本人でありながらも言葉や習慣がわからないために差別的な待遇に悩まされてきた人は少なくありません。しかし、そのようななか、日本に家を購入し定住を目指している人もいます。一方、ブラジルに帰還した人々のなかには、逆境の中をも日本で実直に働いて、貯めたお金でデカセギ・ゴテンを建て、「成功」を可視化している人もみられます。また、日本とブラジルを何度も往復（還流）しているような人も少なくありません。

2 ブラジルと日本における日系人の宗教

日本からブラジルへ、そしてブラジルから日本へという人の移動は、以上の議論で明らかのように主として経済的な理由によるものでした。ブラジルで初期の移民は次男以下の構成家族が多く、家を継ぐ必要がないために「宗教は日本に置いてきた」という感覚がありました。しかし、日本が敗戦を迎えたことで移住者は定住を志向するようになりました。まさに骨を埋める覚悟が生まれ、そこでようやく移住地に墓を作りはじめます。ブラジルを祖国として見做すようになったのです。その後、最初から定住を考える戦後移住者も増加することで宗教活動が盛んになっていきました。

一方、日本にやってきた日系ブラジル人の場合は事情が異なります。還流移民とも呼ばれる日系人が来日し始めた頃、ブラジルは BRICs と呼ばれるような現在の新興国の地位になく、ハイパーインフレといわれる厳しい経済状況にありました。しかしながら、来日した彼らを待っていたのは、都会から遠く離れた田んぼの中に建てられた工場と、理想からはるかにかけ離れた古くて粗末なアパートだったということも珍しくありませんでした。先進国日本へやってきたはずなのにと悲嘆にくれた生活が続いた人、さらに日本人からのいじめや差別、そしてブラジルに残してきた家族への郷愁に苦しみ、悩みを抱える人が宗教を求めるようになりました。

2-1 ブラジルにおける日系人の宗教

ブラジルでは、戦後、植民地でお世話になっているブラジル人（あるいはブラジルという国）の宗教を信仰しようといった理由からカトリックに入信する人は少なくありませんでした。現在、日系人の仏教徒は約 1 割で、約 6 割がカトリック信者です。彼らは自らのコミュニティの中に日本人・日系人のためのカトリック教会を建てました。日系人が多く住んでいるサンパウロ州やパラナ州では日系人しか通わないというようなカトリック教会が現在でも存在しています。移住者の中には布教を目的に渡った人たちもいました。たとえば、日系人のプロテスタント教会で最大規模とされるホーリネス教会は 1925 年から宣教を開始しています。永らく日系人社会の中で展開してきましたが、近年では非日系人信者も増えつつあります。

日本の新宗教も移民によって伝えられました。天理教が 1929 年頃から組織的な布教を開始し、1936 年には本門佛立講が寺を建設します。1950 年には本派本願寺が、そして 55

年までに真宗大谷派、浄土宗、日蓮宗などが開教します。これらの教団は現在でも日系人信者が中心ですが、非日系人が日系人を数で上回っている教団も存在しています。たとえば、日系新宗教の中で信者数が最も多いとされる生長の家（1934年）や世界救世教（1955年）はその代表といえるでしょう。それらは最早ブラジルの宗教になっているかのようです。

2-2 日本における日系人の宗教

デカセギとして来日した日系人のなかで、先述したように悩みや苦しみを抱えて宗教を求めようになった人は少なくありませんでした。ブラジル人の集住率が高い浜松市のカトリック教会では、ブラジル人の信者数が日本人に勝るという例外的な事態を生み出しています。その理由にはブラジル人人口の多さが考えられますが、ブラジル出身の日系人神父が信者を親身にケアしたという経緯があったことも大きかったとみられます。しかし、通常はカトリック教会に安寧を求めても言葉が通じないために信者は別の場所を探すことになりました。

現在、ブラジルをはじめラテンアメリカ諸国、そしていわゆる第三諸国と呼ばれてきた国々でプロテスタント教会の活動が目覚ましいものになってきています。信者は概して布教熱心です。来日した人々のなかにもブラジルでプロテスタント教会に通っていたという人が一定程度おり、自ら悩みを抱えながらも苦しんでいる同邦を救いたいと願う一心から布教活動に専心する人々が現れるようになりました。自身が居住するアパートの一室で家庭集会を開き、信者数が増えると教会という形に結実。牧師として専従者の道を歩んでいる人もいます。このほか、ブラジルに拠点を持つ日本の新宗教教団も信者のサポートを行ってきています。

1993年頃、在日ブラジル人のエスニック・ビジネスが誕生するようになります。その背景には日系人人口の増加があったわけですが、それはエスニック市場が大きくなったことを意味します。日系人がつくった日系人のためのプロテスタント教会もその頃設立されるようになりました。国内に下部教会を20か所ほど擁するアセンブレイア・デ・デウス・ニッケイ教会やミッション・アポイオ教会が代表的といえるでしょう。後者はデカセギとして働いていたペルー、ボリビア、フィリピン、インドネシアの信者が、それぞれの母国で教会を開くようにもなっています。宗教のグローバルな展開が確認できます。ただし、国内に存在する彼らの教会はいわゆるエスニック・チャーチとして機能しており、日本人社会からみれば「浮島」のようになってしまっていることは否定できません。まさに、日本からブラジルに渡った人々の生活が日本でも確認できるのです。彼らはホスト社会からの援助を受けにくいなか、時には擬制的家族としてつながり合い、相互扶助を行っているのです。

おわりに

世俗化された我々現代人の視線には、宗教を生きる人々が「アブナイ」ものに触れているように映ることが多いといえるでしょう。日本における近代史の始まりを喧伝する「富国強兵」の明治時代に創られた国家神道体制が敗戦によって崩壊し、その後宗教を危険視する風潮が浸透する中で起こった地下鉄サリン事件（1995年）は、一般国民の宗教への不信感をさらに深めるものになりました。最近ではイスラームの脅威がかまびすしく報道されています。しかし、「宗教」という言葉のラテン語の語源が **religare**（再び結び付ける）であるというように、宗教は元来、反目し合う人々を聖なるものとの関係性において結び付けるものであるはずです。冒頭で紹介したエリアーデは、人間はそもそもホモ・レリギオース（宗教的人間）であるといいました。私たちは今、そのような宗教にたいする失われた感性を磨くべきなのかもしれません。在日ブラジル人の宗教活動はそのヒントを与えてくれるかもしれません。それはまた、人の移動によって今後ますます多文化化していくであろう日本の将来を考えるための布石になるかもしれません。

関西外国語大学公開講座

ワイナリー化するコーヒーがもたらす富の分配

田代 和弘（田代珈琲株式会社代表取締役）



インターナショナル・コミュニケーション・センター 音楽教室にて

コーヒーとワイン

葡萄というフルーツから生み出されるワイン、コーヒーチェリーというフルーツから生み出されるコーヒー、その歩みは全く違う時間を使ってきました。紀元前から葡萄酒として醸造技術の進歩、葡萄の栽培技術など大きく発展し現在では大きな付加価値を生み出す産業に成長しています。

実はワインに比べてコーヒーの歴史は古くはありません。コーヒーの生産量が世界で一番多いのはブラジルです。しかし、ブラジルにはコーヒーは存在しませんでした。コーヒーの原産地はエチオピアです。そこからアラビア半島に渡り、薬として煮出し飲用されていました。現在のようにコーヒーの種子を乾燥させて煎るというプロセスは 13 世紀後半と言われています。そしてイスラム教の飲み物として認識されていた事実もあります。1600 年頃、ローマ法クレメンス 8 世が異教徒の飲み物としておくのは惜しいということで解禁宣言、ここからヨーロッパ人がコーヒーの飲用をはじめました。そのコーヒーへの欲求を満たすために、白人が植民地から搾取するビジネスモデルの典型的なものがコーヒーです。

大航海時代に一気にコーヒーが世界中に広がり、スペイン人もその中心に存在しています。植民地で原住民やアフリカ黒人などを使って土地を開墾させコーヒーの生産を増やした時代です。コーヒーは南北問題を象徴する産物なのです。いわゆる低賃金で大量生産されたコーヒーを消費国（当時の先進国）で消費するというものです。仮に一杯コーヒーが 100 円としたなら原価を差し引いた付加価値のほとんどは消費国で生まれています。これではコーヒーの素晴らしさを享受しているのは消費国の人たちだけで生産国の人たちは苦



田代和弘 氏

干ばつ、霜害、投機行為などから価格が乱高下することが多くなってきていました。生産者はそれに翻弄され多くの人がコーヒー生産をやめていきました。コーヒー産業の持続可能性が失われたのです。

この危機の解決を果たすのがスペシャルティコーヒーです。価格の決定基準を品質においたのがスペシャルティコーヒーです。美味しいコーヒーが高い。当たり前のことですが、コーヒー業界では意外と確立できていませんでした。スペシャルティコーヒーの発展は 1999 年にはじまったカップオブエクセレンスという品評会とオークション形式で価格を決定する仕組み、これが軸となり美味しいコーヒーとはなにかということが世界中に広まったのです。美味しいコーヒーは標

高の高い所で生産されます。標高の高い所での生産は手間暇がかかります。コーヒーの木
の健康状態を管理するのに肥料を撒く作業をするのに険しさが障害となります。収穫
時も同様です。美味しいコーヒーのチェリー（コーヒー豆はコーヒーチェリーという果物
の種子です）を短時間で果肉除去の工程を終えなければいけません。標高の高い所の生産
者は設備を持っていません。仕方なく標高の低い所にある設備のある農協などへ収穫され
たコーヒーチェリーを売りに行かねばなりません。運んだ時点でコーヒーチェリー
は劣化し価値が失われます。価値を維持し果肉除去の工程を完了するには設備を持たねば
なりません。

「お金が必要です。美味しいコーヒーを生産し持続させるにはコストが掛かるのです」

美味しいコーヒーから生み出される付加価値は生産国と消費国で対等に分配されてこ
そ持続性が生まれると考えます。

消費国と生産国、対等な関係です。美味しいコーヒーが生み出す感動と笑顔は同じくら
い生まれなければなりません。コーヒー産業の持続可能性は笑顔の持続可能性です。

関西外国語大学公開講座 スペイン語の「役割語」

福畠 教隆（神戸市外国語大学教授）



インターナショナル・コミュニケーション・センター ICC ホールにて

本講演は、中宮キャンパス ICC にて 2015 年 11 月 12 日に実施されました。お招き下さった関西外国語大学の皆様、また、熱心にお聴き下さり貴重なコメントを下された参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。

0. はじめに

「役割語」とは、金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』などによって提唱された概念で、特定のキャラクターと結びついた、特徴ある、架空の言葉遣いを指す。日本語の役割語には、たとえば次のようなものがある。

1. 博士語「オッホン、これはわしの大発明なのじゃ」
2. お嬢様語「ごめん遊ばせ。よろしくってよ」
3. 武家語「おぬしも悪でござるのう」
4. 異人語「それホントあるか？」

この講演では、次の2つの問題について考えていきたい。

課題1. スペイン語にも役割語があるか？

課題2. 漫画や小説などで、日本語の役割語はスペイン語にどう訳されているか？

1. 「博士語」

次の例では、日本の漫画の原作に博士語が用いられていて、発言だけで話者の性別、年齢、職業などが彷彿とする。しかし対応するスペイン語訳はごく中立的な表現で、話者についての情報をここから得ることはできない。

- (1)a. クローバー博士「過去は全ての人間のものじゃ。全てを受け入れるべきじゃ」(尾田栄一郎『ワンピース』41、集英社)
- b. Dr. Trébol: —El pasado es herencia de toda la humanidad... ¡Debe ser aceptado en tu totalidad! (直訳：過去は全ての人間の遺産だ…。それはその総体として受け入れられるべきだ！) (*One Piece* 41, Planeta, Barcelona)

このように、一般に「博士語」に相当する形式は、スペイン語では発達していない。

2. 「お嬢様語」

次に、お嬢様語はどうだろうか。今度は夏目漱石の小説を例にとろう。これは明治時代の知的階級の女性の実際の発話を模した会話であり、役割語とは言えないが、その後、お嬢様語の形成の基盤となる、いわばその前段階の言葉遣いである。

- (2)a. とん子「あら多々良さんの頭は御母さまの様に光かってよ」

母「だまっていらっしゃいと云うのに」

すん子「御母さまタベの泥棒の頭も光かってて」(sic) (夏目漱石『吾輩は猫である』5)

b. Tonko: —¡Hala!... La cabeza de Tatará brilla como la de mamá.

Madre: —¡Te digo que calles!...

Sunko: —¿La cabeza del ladrón que entró anoche también brillaba? (直訳:「あら、多々良の頭はお母さんのそのように光っています」「黙りなさいと言うのに!」「夕べ入った泥棒の頭も光っていませんか?」) (*Yo soy un gato*, 清泉女子大学、改訂版、*Yo, el gato*, Trotta, Madrid)

すん子の「光かってて」とは、「光っていますか?」という疑問文である。このような独特の言語形式はスペイン語訳には全く反映されておらず、ごく標準的な親しい人どうしのやりとりになっている。話者が良家の子女であるという情報は、発話からは得られない。このようにお嬢様語も、スペイン語では一般的とは言えない。

3. 「非標準語」

方言などの非標準語も役割語として多用される。スペイン語の漫画などでは、各地の特徴的な言葉遣いが役割語として利用されることもある。次の例は、チリの短編漫画の中のアルゼンチン人、チェ・コペテの台詞である。文中の *pibe* (子ども)、*te acordás* (君は思い出す) という表現にアルゼンチンらしさが出ている。

(3) Che Copete: —¡Veó a esos pibes y... me acuerdo de mis hijos, me acuerdo! ¿Ves a esa mujer y te acordás de Yayita, eh? (チェ・コペテ「あの子どもたちを見ると、我が子を思い出すねえ! 君だって、あの女性を見て(恋人の)ヤイータを思い出すだろう?」) (René Ríos, “Condorito”, *International Press, Edición en Español*)

しかし日本語の原作における方言は、他言語に移し替えることが困難なので、標準的な形式に訳されるのが通例である。次の大阪方言が生む微妙なニュアンスは、スペイン語訳では十分に伝わらない。

(4) a. 久遠寺右京「言うとかくけどな、あかねちゃん。うちも乱ちゃんの許嫁なんやで。こんなとってつけたようなウソで乱ちゃんとり戻せる思たら大間違いや」(高橋留美子『乱馬 1/2』、19、小学館)

b. Ukyo Kuonji: —¡Escúchame bien, Akane! ¡Yo también estoy prometida a Ran-chan! ¡Te equivocas de cabo a rabo si crees que podrás recuperar a Ran-chan con una mentira tan absurda! (直訳「あかね、よく聞きなさい! 私も乱ちゃんと婚

約しているのだ！ こんな愚かなうそで乱ちゃんを取り戻せると思っているのなら、あなたは徹頭徹尾まちがっている」) (*Ranma 1/2*, 19, Glénat, Barcelona)

4. 「武家語」

次の例は、ヨーロッパの中世の騎士が、よこしまな高僧を剣で脅すときの台詞である。vuestra (そなたの)、apartaos (離れよ) という 2 人称代名詞 vos に関連する古用法が見られる。つまり、スペイン語には「昔の人の話し方」を表す役割語が存在するのである。

(5) Caballero: —El acero de mi espada en vuestra piel asquerosa será mi recompensa. ¡Aprtaos! (騎士「そなたのおぞましい皮膚に向けた私の剣の鋼が、私からの答えだ。離れよ！」) (Walt Disney, “La espada y la rosa”, *Aventuras*, Zig-Zag, Santiago)

次の例は日本の戦国時代を扱った漫画で、霊力を持った比丘尼に向かって村の長が言う台詞である。スペイン語訳では vos の系列の表現を使って、原作の雰囲気に移している。

(6) a. 村の長「なにとぞ今年もご功德をお授け下されませ……。どうぞお願い申し上げます」(手塚治虫『火の鳥 異形編』、秋田書店)

b. Alcalde del pueblo: —Os rogamos que, como cada año, tengáis a bien compartir con nosotros vuestra virtud. Nos ponemos en vuestras manos. (直訳「例年と同様にあなた様の美德を私たちと分かち合って下さるよう、あなた様をお願いします。あなた様の手に私たちを委ねます」) (*Fénix*, 9, Planeta, Barcelona)

5. 「異人語」

次の例はスペインの人気ギャグ漫画で、中国人に変装したスペイン人諜報部員が、上司に調査の報告をしようとする場面である。動詞を不定詞のままを使い、主語は略さず動詞の前に置いている。しかも r, rr が l に置き換えられている。これはアジア系の話者のスペイン語の話し方の特徴を誇張したもので、本来は ¡Jefe, yo vengo de espiar el barrio chino! となるべきところである。ここから、スペイン語にも異人語が存在することが確認できる。

(7) Mortadelo: —¡Jefe, “Moltadelo venil de espial el balio chino!”! (モルタデロ「ボス、モルタデロ、中華街をスパイしてきた！」) (Francisco Ibáñez, *Mortadelo y Filemón*, Ediciones B, Barcelona)

日本語の異人語を訳す場合にも、これに類する役割語が充てられる。次の例の原作では、

ロボットが各種の助詞を略した話体を用いている。スペイン語訳でも定形動詞を使うべき箇所不定詞を用いるなどの工夫により、話者が通常の母語話者でないことが示されている。

(8) a. 人造人間 8 号「名前なんという? (...) いちばん上の階いくの たぶんむすかしい。オレつれていってあげる」(鳥山明『ドラゴンボール』6、集英社)

b. Robot número 8: —¿Cómo llamarte tú? (...) Quizás ser difícil llegar al último piso. Yo ir contigo. (直訳: お前、名前何という? (...) 多分最上階に着くのは難しい。私はお前と行く) (*Dragon Ball*, 6, Planeta, Barcelona)

6. 発声困難な話者の発話

さまざまな理由により生じる不明瞭な話し方は、スペイン語ではその様子が忠実に活写される。次の例の発話者は斟酌してろれつが回らない。原文よりも、むしろスペイン語訳のほうが、発話の困難さが誇張されている。

r や j が g で、s が z で代替されているが、本来は ¿Obra de unos piratas? Jua, jua, jua. ¿Y tú crees realmente que sea eso? と表記されるべき表現である。

(9) a. ココロ婆さん「海賊の仕業? んがががおめえ本気れそう思ってるのかい?」(尾田栄一郎『ワンピース』36、集英社)

b. Kokoro: —¿Obga de unos pigataz? Gua, gua, gua. ¿Y tú cgeez gealmente que zea ezo? (かいごくのしばら? グア、グア、グア。で、お前はごんとうにぞうだどおごっていぐのか?) (*One Piece* 36, Planeta, Barcelona)



福嶋教隆 氏

また、次の例では、s を ch で、時に r を l で代替することで、幼児の発音不明瞭な言葉遣いを表現している。

(10) a. 幼女「はい これ きじゅの おくちゅり 血も 止まるの」(手塚治虫『火の鳥 生命編』、秋田書店)

b. Niña: —Toma, echto chervirá para lach heridach y dejará de chalir changre. (直

訳：どうぞ。これは傷に効くだろう。そして血が止まるだろう) (*Fénix*, 9, Planeta, Barcelona)

以上で、冒頭に掲げた2つの課題のうち、「課題2. 漫画や小説などで、日本語の役割語はスペイン語にどう訳されているか?」には、実例をもって答えたものとする。

7. まとめ

ここまでの観察を整理すると、スペイン語の役割語は次のようにまとめることができる。

- ◆ スペイン語の役割語は、日本語より種類が少なく、使用の度合いが低い。
 - a. 「博士語」…… 一般的ではない。
 - b. 「お嬢様語」…… 一般的ではない。
 - c. 「非標準語」…… 存在する。方言の特徴を誇張して表現することがある。
 - d. 「武家語」…… 存在する。古い代名詞 *vos* とその対応形式を使う。
 - e. 「異人語」…… 存在する。不定詞の使用や発音の特徴を誇張して表現する。
 - f. 発声困難な話者の発話 …… 存在する。発音の特徴を誇張して表現する。

これが「課題1. スペイン語にも役割語があるか?」に対する、暫定的な答えである。しかし、これは漫画や文学作品などの文字言語のみに基づいて生まれた結論である。c. 「非標準語」、e. 「異人語」、f. 発声困難な話者の発話といった、スペイン語が持つ役割語には、音声的要素が大きな比重を占めていることに注目されたい。スペイン語の音声言語では、イントネーション、速度、音色などの音声要素や、ジェスチャーなどの非言語要素を大いに生かして、話者の特徴づけがドラマチックに行われる。形態統語的または語彙的な手段を使わなくとも、たとえば「博士語」は、しわがれた声、低く重々しい口調、咳払いなどを利用して、また「お嬢様語」はかん高い、きどった口調、笑い声などによって、十二分に表現される。スペイン語の役割語を考えるときは、こういった演劇的な効果も対象に入れなければならない。

スペイン語の持つ演劇性は、役割語以外の分野にも観察される。たとえば、次のことわざを見てみよう。

- (11) a. Dijo la sartén al cazo: “Quita, que me ensucio”. (フライパンが手鍋に言った、「立ち退け、汚れてしまう」と。)(= 五十歩百歩)
- b. Dice el puerco: “Dame más”; dice el amo: “Ya verás”. (豚が言う、「(食い物を) もっとよこせ」と。飼い主が言う、「今に分かるさ」と。)(= 知らぬが仏)

これらは日本語のことわざには一般的ではない特徴が見られる。(11a, b)ともに直接話法の形式をとり、特に(11b)は対話形式である。また、(11a)の主動詞は過去形になっている。このようにスペイン語では、古くから言い伝えられてきた教訓や風刺を、演劇のような形式によって表現することが容認されている。スペイン語の役割語の演劇性も、このような特質の延長にあると見ることができよう。

役割語は「紋切り型になってもいいから、物語を効率よく提示したい」という普遍的な動機から生まれたもので、どの言語にあっても不思議ではない。スペイン語は、一見、日本語よりも役割語の発達の度合いが低いように見えるが、実は文字言語よりも音声言語の領域に役割語的要素が観察される言語であると考えられる。これをもって課題2の最終的答えとしたい。

主たる参考文献

金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』、岩波書店。

_____ (2014) 『コレモ日本語アルカ?』、岩波書店。

_____ (2014) 『《役割語》小辞典』、研究社。

福嶋教隆 (2013) *El español y el japonés*, 神戸市外国語大学 (第7章 Las expresiones de rol en español, pp.123-137)。



スペイン語教授法研究会例会

第8回スペイン語教授法研究会

異文化能力の育成について考えよう

—スペイン語教育における文化リテラシーと異文化トレーニングのアイデア—

四宮 瑞枝 (早稲田大学文学学術院講師)

外国語教育は、言語の構造や機能とその使い方を学ぶだけでなく、異文化に関する知見を深め、異文化接触場面や多文化社会において適切な行動を取れる能力を養うことを目的とするものであり、人間教育としての広い枠組みでとらえる必要がある。しかしながら、文化学習に対する関心が高まる中で「文化」という言葉だけが一人歩きし、「文化を扱う」「異文化を理解する」ということが単に異文化情報を与えることに留まり、結果的にステレオタイプを助長させている場合もある。

本ワークショップは、異文化能力の定義と構成要素とその獲得過程、異文化教育におけ

る文化の扱い方について理論的背景などを概観するとともに、異文化接触の難しさを体感させる簡単な異文化トレーニングや、異文化能力育成を念頭においた外国語指導法を幾つか紹介して参加者の方々に体験していただくことで、行動力に結び付く異文化学習の考え方を知っていただくことを目的とした。それぞれの要点は以下の通りである。



中宮キャンパス 多目的ルームにて

1. 異文化能力の定義と構成要素：異文化能力は自他の文化の違いを理解し、双方から一定の距離を保ちつつ、互いの関係を構築する能力である。ヨーロッパにおける異文化教育の第一人者である Byram 氏が掲げる異文化能力の構成要素（知識・態度・2種類の技能・批判的文化意識）と、それをシンプルにした四宮の案（知識・態度・技能の3要素に文化リテラシー、クリティカルシンキング、感性の要素を明示して付加）を紹介した。
2. 異文化能力の獲得過程の重要性と3種の文化形態：異文化能力の獲得は好意的な態度と否定的な態度を経ることで中立の立場で異文化を受容できるようになり、それが行動力に結び付くというプロセスの重要性を指摘した。また、アメリカの外国語教育基準では文化を「物の見方」「実践形態」「文化的所産」という3つの形態に分析して授業案が提案されていること、「物の見方」を知ることが鍵を握ることなどを紹介した。
3. 異文化接触トレーニング：すぐに教室で短時間で行えるものを幾つか紹介した。「文化にはそれぞれのルールがあり、ルールが解らなければ上手に対応できない。またルールが解っても自分の感覚に馴染まないものには抵抗感が伴う。さらに、ルール自体の捉え方が各自で異なる、部分的妥当性しか無い、主観と客観によって判断が違うなど、ルールを理解するだけでは対応も適応も難しいものが多い」ということを、一連の活

動で体感することで理解していただけたのではないかと思います。

4. 異文化能力育成のための指導法：自文化に対する気づきを促す指導法 **Culture Self-Awareness** と、描写・解釈・評価の 3 ステップで事象を説明することで観察眼と理解力を養う指導法 **DIE (Description, Interpretation, Evaluation)** を紹介し、スペイン語授業の事例で体験していただいた。最後に授業実践上の問題点やアイデアを参加者同士で話し合っていたり時間を設け、その結果を全体でシェアして終了とした。

編集後記

今年度は「21 世紀、ブラジルからの問いかけ ―民衆の変革力―」をテーマに 3 つの連続講演会を開催した。ラテンアメリカで 1968 年、メキシコシティ五輪が開催された。およそ半世紀の歳月を経て、2016 年 8 月、リオデジャネイロで五輪が開催される。経済成長やサッカーにとどまらないブラジル。社会矛盾を解決し公正な社会を築こうとする国民の活力に焦点をあてた。一方、スペイン語では 2 つの講演会を開催し、スペイン語に対する学生のモチベーションを高めることができた。最後に、講演者と関係者の協力なくして活動を実現できなかったことは言うまでもない。

(イベロアメリカ研究センター長 林 美智代)

2016 年 2 月発行

発行 KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センター

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1

TEL.072-805-2801 (代表)

<http://www.kansai-gaidai.ac.jp>